

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720024

研究課題名(和文) 世親論書の訳注研究 『釈軌論』第二章を中心に

研究課題名(英文) Annotated Translation of a Treatise by Vasubandhu: Focusing on Chapter 2 of the Vyakhyayukti

研究代表者

堀内 俊郎 (Horiuchi, Toshio)

東洋大学・国際哲学研究センター・研究助手

研究者番号：60600187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：世親(Vasubandhu)の手になる『釈軌論』第2章について、主に訳注研究を行った。世親は同章で103の経節を阿含(ア-ガマ)から引用して解釈するが、その103の経節のうち、ほぼすべてを現存の阿含・ニカ-ヤに出典を求めることができた。もっとも多いのが『雑阿含』で、次いで『中阿含』(前者の半分ほど)であり、『長阿含』からは二経のみであった。そして、その出典比定により、サンスクリット原語を想定しながらの正確な訳読を目指した。和訳注の全貌に関しては、2014年中にまとめて書籍の形で刊行する予定であり、それに向けて引き続き訳語や書式の統一や索引作成を行っている。

研究成果の概要(英文)： The central aim of this research was the translation of Chapter 2 of Vasubandhu's Vyakhyayukti (rnam par bshad pa'i rigs pa, Logic of Exegesis).

Vasubandhu cites and interprets 103 sutra passages in the chapter, which contains abundant information on the agamas (scriptures) that were passed down to him. This work has identified almost all of the 103 citations. The most frequent citation was from the Samyuktagama. What follows is the Madhyamagama, which numbers about half of the former. Citations from the Dirghagama number only two. Further, after identifying the source, this research tried to translate the text accurately by assuming a Sanskrit original. As for telling the whole story of Chapter 2 of the Vyakhyayukti, I will publish a Japanese annotated translation as a book in 2014. Thus, I continue to unite the term and style and am creating the index.

研究分野：印度哲学・仏教学

科研費の分科・細目：若手研究B

キーワード：『釈軌論』 世親 阿含 経典解釈 徳慧

1. 研究開始当初の背景

インド大乘仏教のうち、唯識思想(すべては心のみであると主張する思想)の大成者である世親(ヴァスバンドゥ、400年ごろ)の作とされる論書に、『百節経』『釈軌論』という著作がある。『百節経』(デルゲ No.4060、北京 No.5561)とは、膨大な阿含經典(アールガマ、釈尊の言葉を伝えたとされるもの)から、世親自身が百あまりの文章を集めた著作であり、比較的短い。他方、『釈軌論(經典解釈の方法)』(デルゲ No.4061、北京 No.5562)は比較的分量が多いが、その第二章は、語句の意味とはいかなるものか、その解釈法はいかなるものかを示すために、その『百節経』に引いた阿含の経句を解釈する章となっている。この『釈軌論』には徳慧(グナマティ)作の『釈軌論注』(デルゲ No.4069、北京 No.5570)という注釈書があり、『釈軌論』『百節経』と同じく元はサンスクリットで書かれたものであるがチベット語訳としてのみ残る。

「幹部の論師」と言われるように、世親に帰せられる著作は多い。その中、『釈軌論』は、『俱舍論(アビダルマの蔵)』の次に書かれたとされながらもその第四章で大乘仏説論(大乘仏教は仏説であるという論)を展開していることから、最晩年に唯識思想を大成するまでの世親の思想展開を追う上で極めて興味深い。また、特にその第二章は、百余りの阿含の経節を引用していることからして、まず興味深い。というのは、阿含(・ニカーヤ)もわれわれが今手にしているものがすべてではなく散逸したものもあり、それがこの第二章に含まれている可能性もあるからであった。また、阿含の経句は意味が明確でないものも多いが、ここでは碩学による阿含の語句の解釈が展開されているという辞書的性格からしても、この第二章は興味深いものであった。

このような理由から『釈軌論』はその重要性が指摘されて久しい。古くは山口益氏による概要紹介(1959、1962年)があり、約二十年の空白の後、松田和信氏、本庄良文氏、李鐘徹氏、Peter Skilling氏らによって、部分的な研究がなされてきた。『釈軌論』は五章から成るが、残念なことに、未だ全体の半分以下の分量しか、訳注研究が進んでいない状況にある。また、『釈軌論』全体のチベット語校訂テキストは李氏により出版されている(2001年)が、問題なしとはしない。なお、私は、以前、大乘仏説論を取り扱った『釈軌論』第四章を取り上げ、徳慧による注釈とともにチベット語訳校訂テキストを作成し、訳注を施し、それに基づいた思想研究を行った(堀内[2009]山喜房佛書林)。その方法論は、サンスクリット原典を想定しつつ、厳密を目指した訳注を試みた、というものである。

本書は、このように、サンスクリット原典が散逸しチベット語訳でのみ残るとい

料的状況もあってか、未だ全体の半分以下の分量しか訳注研究が進んでおらず、ことその第二章に至っては、九割以上に關して、現代語への訳出や、そこで引用されている阿含の対応經典の比定などが未解明のまま残されているというのが、研究開始当初の背景であった。

2. 研究の目的

上記のような背景、問題意識のもと、その『釈軌論』・『釈軌論注』第二章について、校訂テキストの作成ならびに訳注研究を行い、世親と徳慧の思想の一端の解明に貢献したいというのが、本研究の目的であった。具体的には、以下の通りである。

『百節経』全体、『釈軌論』第二章、『釈軌論注』第二章のチベット語訳校訂テキストを作成する。そして、それらに対する訳注研究を行う。

本研究の独創的な点は、まず、未だ翻訳が提示されてこなかった文献に対する初めての訳注研究であることにある。

また、徳慧の『釈軌論注』の校訂テキストは、かつて筆者が公刊した第四章のそれ以外には現在のところ公刊されていないが、本研究により、第二章に対する校訂テキストが提示されることになろうという点も、独創といえよう。

特色としては、近年の研究の成果を十分に踏まえた上で、さらにそれらに寄与しようということにある。すなわち、『釈軌論』は、『俱舍論』と唯識論の間に位置するという関係上、世親の思想の展開を探る上で興味深い著作である。特に、第二章は阿含に対する語句注解であるので、世親がいかに阿含の思想を咀嚼し、後の大乘思想へと活かしていったのかという点が、幾分、解明される可能性があった。

また、阿含研究についていえば、古くから赤沼智善氏の研究が必携であるが、本課題と密接に関連する近年の研究としては、北伝の四阿含のうち『雜阿含』と『中阿含』について、近来発見されてきたサンスクリット原典を網羅的に一覽とした Chung 氏の研究や、本庄氏による『ウパーイカー』研究がある。阿含研究に関しては、SAT(大正蔵テキストデータベース)も近年ますます充実しており、出典比定に際してはおおいに参考としたい。他方、世親の引用する阿含の全貌を示すことで、逆に、阿含研究にも寄与するところがある。

3. 研究の方法

研究の方法は、以下の通りである。まず、当該テーマに関する先行研究の蒐集を行う。次に、『百節経』『釈軌論』『釈軌論注』第二章のチベット語訳テキストの入力、確定を行う。具体的には、北京・デルゲ・ナルタン・チョネ・金写という、現存のチベット語訳の五版本を集め、デルゲ版を底本にして校合・

校訂を行い、テキストを確定する。世親本文のテキストを確定する際には、徳慧の注に引用されている世親本文や、関連文献にも広く眼を配ることによって、より厳密な校訂を目指す。最後に、あるいは同時並行的に、訳注研究を行う。というのは、テキストの確定と翻訳は、表裏一体のものだからである。さらに、それらの作業を行っているうち、さまざまな問題に突き当たるであろうから、その時点でまた、関連研究の蒐集も必要となってくるであろう。また、引用経典の比定により、サンスクリット原語を想定しながらの、より厳密な訳注が期待される。

より具体的には、以下の通りである。

(1) 文献研究として、まず、チベット語訳テキストの入力を行う。

『釈軌論』第二章(デルゲ、Shi 40a-83b、北京 Si 45b-98a)・『百節経』(デルゲ、Shi 17b-29a、北京、Si 19a-31b)・『釈軌論注』第二章(デルゲ、Si 155a-247b、北京、I 19b-125a)に対するチベット語訳の五版本(北京・デルゲ・ナルタン・チョネ・金写)を揃える。つぎに、デルゲ版を底本にするので、デルゲ版のテキストを入力する。その後、他の四版本の異読を注記してゆく。『釈軌論』についていえば、『釈軌論注』にも、『釈軌論』本文が引用されているので、『釈軌論注』中での引用文も、適宜、異読として入力してゆく。

先行研究の入手・精読：

『釈軌論』についてはこれまでの自身の研究で蒐集してきた蓄積があるが、特に、阿含研究について、先行研究の入手、精読を行う。

チベット語訳校訂テキストの作成：

校訂テキストの完成を目指す。校訂テキストの確定と内容理解(訳注)は表裏一体の関係にあるため、入力したテキストを、内容理解に基づき、精査する。また、徳慧の注釈に引用されている異読の方が、世親本文としてふさわしい場合もあることが、『釈軌論』第四章の場合に経験されているので、それもあわせて吟味する。また、以下で述べる訳注研究の作業も、テキスト確定に必須である。

『百節経』『釈軌論』『釈軌論注』第二章訳注研究：

訳注に際してであるが、サンスクリット原典が失われ、チベット語訳にのみ残る文献に対する研究であるので、原語の厳密な想定が、翻訳の精度を決めることになる。それゆえ、まず、各種の辞書・索引を用い、一々の原語を想定してゆく。特に、『俱舍論』は同じ著者の手になる書であるから、それに対する索引を多く参照することになる。

『百節経』に引用されている阿含経典の、現存テキストへの比定：

先述したように、『百節経』とは、世親が当時見ていた阿含経典から約百の文章を集めた文献であり、『釈軌論』第二章がそれに対する世親自身による語句注解である。そこで、『百節経』に引用されている百あまりの

阿含経典の文章が、現存の阿含・ニカーヤのどれに相当するかを調査する必要がある。この作業は、先行研究では、全体の約一割ほどに対してしかなされていない。そこで、本研究では、その全体を調査する。この比定作業により、世親のチベット語テキストに対する漢訳・パーリの対応語句が得られることになり、より精密な翻訳がなされることが期待される。また、逆に、この作業により、校訂テキストが適宜、訂正されてゆくことにもなる。

(2) 思想研究の観点からは、以下の二つを行う。

まずは、世親の他の著作との関わりの検討である。すなわち、『釈軌論』は『俱舍論』と唯識論(『二十論』『三十頌』)の中間に位置する著作であるので、世親思想の展開を知る上でも重要な資料となる。その観点から、世親の他の著作との関連を検討する。

次には、世親と徳慧の関係の調査である。徳慧は世親の直弟子とされていたが、世親が引用した阿含と徳慧が引用した阿含が異なっていた例を指摘し、世親と徳慧の年代が、少し離れているであろうという説も提起されている。本研究により徳慧の見ていた阿含がさらに明らかになるから、徳慧と世親の関係について知見が得られることとなる。また、徳慧独自の思想についても、切り込んでゆきたい。

4. 研究成果

研究成果は、簡潔には、以下の通りである。『釈軌論』第二章について、主に訳注研究を行った。世親は同章で一〇三の経節を阿含(アーガマ)から引用して解釈するが、その一〇三のうち、ほぼすべてを現存の阿含(ニカーヤ)に出典を求めることができた。もっとも多いのが『雑阿含』で、次いで『中阿含』(前者の半分ほど)であり、『長阿含』からは二経のみであった。そして、その出典比定により、サンスクリット原語を想定しながらの正確な訳読を目指した。また、テキスト校訂についても、従来の校訂テキストに対して大幅な修正案を提示することができた。

研究成果は、より詳細には、以下の通りである。

(1) まず思想研究の観点からは、そこで展開される阿含解釈の特徴を、大乘・瑜伽行派との関連から検討したところ、以下の結果が導き出された。(以下では『釈軌論』第二章で引用される一〇三の経節を番号づけて示している。)

・経節(二)への解釈では、仏陀を解釈するに際し、仏陀は煩惱障と所知障から解脱していると、大乘・瑜伽行派で重視される所知障という概念を用いている。

・経節(三九)では、転依、真如、出世間後得世間智という語が見られる。ただ、転依に関連して第四章で出るような大乘的な仏身論(変化身・自性身)は登場しない。

・経節(五七)では、法無我という語が出、また、如所有〔性〕と尽所有〔性〕という、「声聞地」「菩薩地」が初出とされる術語が言及され、さらには微細〔慧〕と周微〔慧〕を順にその両者に配当することは、「菩薩地」慧品と同じであることが注意される。

・世親は一つの経文に対して「さらにまた」として、別のいくつかの観点からの解釈を施すことが九割方である。そして、その場合、最後に、『聖教(伝承)』では」と、『聖教』の引用がなされるという例が十八例ある(そのうち一つ(経節(八三))では「信頼される伝承」と出る)。そのうち、幾つか〔のみ〕は、『瑜伽論』『撰積分』や「声聞地」に、ほぼ一致している。また、同じ『雑阿含』を解釈するものとして『瑜伽論』『撰事分』が着目されるが、同じ経文が解釈されていて、一致・類似しないことの方がほとんどである。

以上その特徴を列挙したが、徳慧が「声聞地」に言及している(経節(十四))例を除くと、世親自身の阿含解釈についていえば、大乘的、あるいは瑜伽行派的な術語が見られるものの、大乘や瑜伽行派からの解釈を前面に打ち出したものであるとはいえない。ただし、つとに指摘されており筆者もかつて検討を加えたことであるが、『釈軌論』第二章の最後の経節(経節(一〇三))で十二分教を列挙する阿含を引き、そこに出る方広(vaipulya)を大乘と解釈しているということ、そしてさらには、その解釈が第三章で論難されて第四章で大乘の仏説が論証されるという構成上の観点からみて、やはり本論は大乘者としての世親の著作とせねばなるまい。以上がその検討の結果である。

(2) 文献研究としても、きわめて興味深い知見がいくつか得られた。

まず、一〇三の経節のほぼすべてについて、阿含・ニカーヤにその出典を比定することができた。最も多いのが『雑阿含(相应部)』で、次いで(前者の半分ほど)『中阿含(中部)』であり、『長阿含』は二経のみ。概ね漢・パがともに得られる場合が多いが、パーリ対応、あるいは逆に、漢訳対応がない場合もある。なお、世親の引用する經典は、パーリ・ニカーヤよりも漢訳阿含に近い例がしばしばあることが明らかとなった。

サンスクリットをチベット語に翻訳する際の欽定訳語集である『翻訳名義大集』には数多くのエントリーがあるが、なかにはランダムに見える単語の配列がある。しかしそれは阿含から、より正確に言えば『釈軌論』(『百節経』)に引用される阿含から抜き出したものと思われることが判明した。これにより一方では『翻訳名義大集』の出典の一部が明らかとなったこととなり、他方では、『釈軌論』所引の阿含のいくつかの語句について、確かなサンスクリット原語を想定することが可能となった。

『釈軌論』第二章は後代のいくつかの論書に引用されていることがこれまで指摘さ

れてきた。これにより、サンスクリット原典があるものについては、原語を想定しながらの訳読が可能となり、また、『釈軌論』のチベット語に関しても、訂正を行うことが可能となる。今回新たに発見できたことは、以下の通りである。

『俱舍論』に対するヤショームトラの注が、『釈軌論』での經典解釈をそのまま引用している、あるいは別の箇所では援用をしている。『菩薩地』に対する徳光(グナプラバ)の注が、『釈軌論』を引用している。これにより、『釈軌論』で従来偈頌としてとらえられていなかった箇所がチベット語訳者の誤訳であり、偈頌としてとらえるべきであることが判明した。また、同じ箇所については海雲(サーガラメーガ)の注があるが、それも『釈軌論』を援用している。

『釈軌論』第二章で引用されているある阿含について調査したところ、『瑜伽論』もそれを、經典の形ではなく定型句として援用していたことが判明した。また、それはパーリにはなく漢訳阿含にのみ存する定型句であり、これにより、従来サンスクリット対応が知られていなかったある一連の経句について、その原語が初めて知られることとなった。

また、別の経句については、出典は比定できなかったものの、『婆沙論』や『施設論』でも確かに經典として引用されているものであったことが知られた。

このように、(1) 思想研究、(2) 文献研究として成果があり、それは折に触れ発表してきたが、このような訳注研究は、索引とともに、全体をまとめて公表することが望ましい。そこで、その全貌は、訳注として、索引も付して、書籍の形で、今年中に出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

堀内俊郎「『釈軌論』第二章所引の阿含と世親・徳慧による解釈の特色」『宗教研究』、査読無、第 87 巻別冊(第 72 回学術大会紀要特集) 2014, 333-334。

堀内俊郎「『釈軌論』第二章経節(62)-(63) 訳注 多文化共生の基盤の構築に向けての「法を説き・法を聞く」こと」『国際哲学研究』、査読有、2号、2013, 153-164 (英語版: Horiuchi Toshio, "An Annotated Translation of Sutra Passages 62 & 63 in Chapter 2 of the *Vyakhya-yukti* "Speaking and Listening" as Means towards the Construction of a Basis for Multicultural Coexistence", *Journal of International Philosophy*, 2, 355-368)

堀内俊郎「仏教における法概念の多様性

思想史的観点から」『国際哲学研究 別冊 2 <法> 概念の時間と空間』、査読無、2013, 41-50.

堀内俊郎「仏教における共生の基盤の可能性としての「捨 (upeksa)」」『国際哲学研究』、査読無、1、2012, 129-135 (英語版: Toshio Horiuchi: "Upeksa as a Potential Basis for Kyosei in Buddhism", *Journal of International Philosophy*, 1, 281-288)

〔学会発表〕(計 2 件)

堀内俊郎「『釈軌論』第二章所引用の阿含と世親・徳慧による解釈の特色」、日本宗教学会第 72 回学術大会、國學院大学、2013 年 9 月 7 日。

堀内俊郎「世親の大乗仏説論」、金剛大東京大合同セミナー(招待講演)、金剛大学(韓国)、2012 年 2 月 18 日。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内 俊郎 (HORIUCHI, Toshio)

東洋大学・国際哲学研究センター・研究助手

研究者番号：60600187